ZOCALO 2023 4 ▸ 5

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

倉田白羊と森田恒友

MOMASコレクション第4期
2023年3月4日(土) ～ 5月7日(日)

浦和出身の倉田白羊(1881-1938)と、熊谷出身の森田恒友(1881-1933)は、同じ年に生まれ、明治末から昭和初期にかけて活動した画家です。当館では、これまでに企画展「倉田白羊展」(2004年)や「森田恒友とその時代」(1991年)、「森田恒友展」(2020年)を通して、埼玉県に縁のある二人の画業を紹介してきました。今回のMOMASコレクション第4期では二人の交友関係に焦点を当て、「倉田白羊と森田恒友」と題した特集展示を行います。

東京美術学校(現・東京藝術大学)を卒業し、洋画家の道を歩み始めた白羊と恒友が初めて仕事をともにしたのは、雑誌『方寸』の編集現場であったと考えられます。『方寸』は1907(明治40)年に恒友、石井柏亭、山本鼎が創刊した美術文芸雑誌で、翌年に白羊や小杉未醒らが同人に加わり、1911(明治44)年まで刊行が続けられました。『方寸』に携わった美術家たちは誌面を飾る挿絵の制作に励み、文学にも関心を寄せて随筆や詩の執筆にも取り組みました。白羊と恒友は『方寸』を通じて、長く活動をともにする山本鼎や小杉未醒とも親交を深めていきます。

1914(大正3)年、新しい制作環境を求めて、恒友はフランスへ、白羊は小笠原へと旅立ちます。二人は翌年東京に戻り、はじめは再興院展洋画部で作品を発表しますが、やがて小杉未醒、山本鼎らとともに院展を脱退し、1922(大正11)年に新たな美術団体・春陽会を結成しました。『方寸』から一緒に活動してきた旧知のメンバーに、梅原龍三郎、岸田劉生などを交えて立ち上げた春陽会は、白羊と恒友にとって晩年の重要な発表の場となりました。

左:『方寸』第4巻第1号、1910年1月(表紙:倉田白羊)
右:春陽会結成当日の記念写真 1922年1月14日
前列右から三人目が倉田白羊、後列左から二人目が森田恒友

ここで、二人が後半生にたどり着いた作風に眼を向けてみましょう。白羊は1922(大正11)年に山本鼎が新設した日本農民美術研究所の副所長として、信州上田(現・長野県上田市)に転居しました。上田に移住した後は《山ふところ》のように、写実を重視し、信州の強い陽射しに照らされた山あいの景色を明確な陰影表現によって描くようになります。一方、恒友はフランス滞在中にセザンヌから強い影響を受けますが、帰国後は日本の風景に適した画材を求めて、次第に制作の主軸を油彩画から水墨画に移していきます。晩年には《山野万緑》のように、湿潤な大気をはらむ水辺の景色とそこに暮らす人々をおおらかに捉えた日本画を制作しました。

このように二人の作風は大きく異なりますが、ともに立ち上げた春陽会は共通の芸術的な主張を求めず、それぞれの画家の個性を尊重する自由闊達な雰囲気の中で発展していきました。洋画家を中心とする団体でありながら、油彩画と並べて水墨画や素描を同じ壁に展示するなど、多様な技法の出品が認められていたことも春陽会の特徴のひとつです。恒友も水墨画や素描を多く出品しており、自由な創作と発表が認められていた春陽会は、白羊と恒友の晩年の活動を支えたといえるでしょう。

また作風は対照的であっても、何気ない自然風景とその地に暮らす人々の生活に眼を向け、共感を込めて描き出す二人の制作態度には共通点が見出せます。白羊は日本農民美術研究所で農民に図案や基礎デッサンを教え、農村の生活を文化的にも経済的にも支援するとともに、身近な農村風景や労働者の姿を凝視し、カンヴァスに克明に捉える制作を行いました。一方、恒友は長閑な田園風景とそこに暮らす名もなき人々の日常を少しの寂しさとともに愛しむように描いています。1933(昭和8)年に恒友が亡くなったとき、白羊は追悼文に「森田君は野原に寝そべるくせがある」「森田君は絵が好きである前に自然が好きなのだ」(※)と記し、恒友の自然好きを強調しています。二人が自然を見つめ続けた背景には、急速な近代化の中で失われていく田園風景への郷愁や、自給自足の生活を営む農村社会への憧れがあったのではないでしょうか。

左:倉田白羊《山ふところ》1933年
右:森田恒友《山野万緑》1926-27年頃(後期展示)

当館では、恒友が旧蔵していた白羊の作品や、恒友がフランスから白羊に宛てた葉書など、二人の交友を物語る作品資料を所蔵しています。今回の展示では、こうした当館のコレクションに借用作品を交えて、二人の画業の歩みを25年以上にわたって続いた交友関係に注目しながらご紹介します。(Y.T.)

※ 倉田白羊「兄貴恒友」『アトリエ』第10巻第5号、1933年5月

研究ノート　菊沢武江(1882-1975)の生涯

《秩父御巡幸絵巻(第二巻)》(部分) 1956(昭和31)年
太平洋セメント株式会社蔵

1955(昭和30)年11月10日、埼玉県秩父市の秩父セメント株式会社(現在の秩父太平洋セメント株式会社)へ昭和天皇が行幸しました。当時秩父セメントは、戦後急速に需要が高まったセメントの供給を大きく支えており、産業視察が行なわれることになったのです。社員一同に出迎えられた昭和天皇は工場を天覧し、翌日には社長の案内のもと、武甲山はじめ雄大な秩父の山並みを眺め、紅葉の美しい景色のなか散策されます。これを記念し、2巻からなる絵巻物《秩父御巡幸絵巻》が制作されました。秋晴れの2日間の様子が、透明感のある爽やかな色彩による風景表現、簡潔かつ素朴な人物描写で展開していきます。縦40cm、長さは2巻合わせて約16mの大作を手掛けたのは、埼玉県ゆかりの日本画家、菊沢武江です。武江は大正期から昭和戦前期にかけて文展・帝展で活躍しました。出品作の多くは鶏や猫、猿がモチーフとなっており、花鳥画を得意とした画家です。

1882(明治15)年、武江は埼玉県北埼玉郡加須町(現在の加須市)にある酒屋の三男に生まれます。本名は六兵衛、生来絵を好み、特に写生を得意としたそうです。1902(明治35)年頃、寺崎広業門下による展覧会に感銘を受けて出品作家の稲田吾山を訪ね、まもなく広業に入門します。当時の作品は確認されていませんが、1903(明治36)年の模写作品が数点残されています。主に狩野派や雪舟の仏画、山水画を水墨淡彩で模写しており、すでに筆や墨の扱いに習熟していたことがうかがえます。また、1904(明治37)年頃のスケッチブックには、日露戦争従軍兵の葬儀の様子や、旅先で出会った人々などが水彩と鉛筆で描かれています。みずみずしい色彩、柔らかな輪郭線による人物描写は《秩父御巡幸絵巻》に通じる表現です。

1907(明治40)年、東京美術学校日本画選科に入学。同級に中村岳陵や小出楢重がいました。1912(明治45)年、卒業制作で《野菜の店》を提出し、次席で卒業します。1915(大正4)年の第9回文展で初入選を果たすと、その後も入選を重ねていきます。1917(大正6)年からは、橋本邦助、野田九浦らと設立した芸術社の展覧会を開催。1920(大正9)年以降は、横浜美術展覧会にも出品しています。武江は一時期横浜の野沢屋百貨店意匠部に勤務していたことから、横浜へ活動の範囲を広げていたと考えられます。なお、昭和20年代に結成された頒布会「武江会」には、横浜市長が賛助に加わっており、長く縁が続いたようです。

スケッチブック(部分) 1904(明治37)年頃　個人蔵

着実に実力をつけていった武江は、1929(昭和4)年、第10回帝展出品作《群鶏》で特選を受賞、画壇での地歩を固めます。1934(昭和9)年には皇室へ作品を献上するなど、順風満帆に活動を続けましたが、1945(昭和20)年、戦禍を避け南埼玉郡菖蒲町(現在の久喜市)に疎開します。菖蒲町では地元の名士と交流、注文に応えてさまざまな画題の作品を描きました。

戦後、武江は画壇から遠のき、個人の依頼に応じて吉祥画などの制作を旺盛に続けます。また、1954(昭和29)年頃には、久喜八雲神社の祭礼に用いられる山車の襖絵を描いたようです。そして1956(昭和31)年、《秩父御巡幸絵巻》を制作。1964(昭和39)年には、秩父セメントより再度依頼を受けて、当時の皇太子と皇太子妃である明仁親王殿下、美智子妃殿下の秩父行啓を記録する絵巻物の制作を開始します。工場で働く人々の姿など、工場内の様子がより仔細に描かれ、昭和天皇行幸の際とは異なる雰囲気となっています。武江はお二人の姿を雑誌や新聞の切り抜きも集めて幾度も下書きし、構想を練りました。これらの絵巻物は武江晩年の代表作に挙げられるでしょう。

《群鶏》1929年頃

MOMASコレクション第4期(後期:3月28日～5月7日)にて、帝展受賞作《群鶏》のほか、ご遺族が所蔵する資料や《秩父御巡幸絵巻》などをご紹介します。画業の詳細、作品の所在などまだ明らかでない部分も多く、ご紹介できるのは武江の93年にわたる人生のほんの一側面にはなりますが、生涯誠実に描き続けた画家の姿を感じていただければ幸いです。(K.M.)